

研究者の視野を飛び越える 社会で活用される 研究開発のあり方とは

ここまで、社会課題解決に資する研究開発における人材育成について、事例を含めてお伝えしてきました。研究の成果が社会で活用されるためにはどのようなことが重要なのか、RISTEXセンター長・小林傳司、公私領域総括・山田 肇、SOLVE for SDGs総括補佐・川北秀人の3名が今、改めて考えます。



研究者は常に正しいわけではない。
多様な担い手と共に進める研究開発を



小林 —— RISTEX では、常に社会実装という言葉を意識するような活動に取り組んできました。この社会実装というのは非常に難しく、研究の成果を社会の中で活用する担い手が非常に大事で、その担い手のところまで視野が及ばなければ、社会課題解決に資する研究開発というのは完了しないのではという議論をずっとしてきたわけです。この担い手の問題というのが、この冊子のテーマである人材育成という言葉で表現されています。

川北 —— 事例紹介での熊さんのお話にもありましたが（7 ページ）、それぞれの地域特性に合わせた最適化を一定程度認めるということは「社会技術の研究開発は多様な人たちと進めていくものである」ということを体現されていて素晴らしいと思いました。研究者はパイオニアであり常に正しいと思い込んでしまうと、その研究者の視野内でしか発展ができなくなります。重要な研究分野であるほど、研究者の視野を超えて、想像できていなかった多様性を持った発展を促すために、多様な担い手を前提とした社会技術を想定しておくことはとても重要です。



山田 —— 多様性を理解して対応していくことの重要性は、僕もつくづく感じています。地域にも多様性があって、例えば「東京」といっても決して一律ではありませんよね。多様性を理解しながら、そこに適用できる技術にしていく、あるいはそれを普及していくことに力を発揮する人を育てていくことは非常に重要です。

川北 —— 民間企業であれば、どれだけ規模が大きくなろうと自身で運営することになりますが、社会技術の場合は、規模が大きくなるほどタイプの違う人たちの力も借りていく必要がありますね。社会的な営みは、基礎技術がどんなに確立されていたとしても、応用は一对一なので、現場の最前線で実装を担う人材の育成、その人たちのための支援ツール開発が継続的に必要です。



小林 傳司
社会技術研究開発センター（RISTEX）
センター長

小林 —— 「第6期科学技術・イノベーション基本計画」で「総合知」という表現がされていますが、社会課題が先にあって、その解決に必要な「多様な知」を動員するということは、ある意味でRISTEXは先取りしていたのかもしれないと思います。研究というものには社会実装までが含まれているんだということを、研究者のみならずプロジェクトに関わる全員で共有していくことが重要であると思います。

山田 —— 社会技術の実装の場合、研究者が「こういうことができた、素晴らしいでしょう」と言うだけではなく、それを実装するために市役所のどの課とこんなことをやっているんですよということまで伝え、他の研究チームでもやり方がわかって進められるようになる。そういう意味での情報共有が重要ですね。

川北 —— 仕組みの開発って結局は人材育成やツールのテストなど、研究代表者だけが行うものではないので、研究代表者同士だけでなく、共に研究する関係者や一連の流れを管理したり調整したりロジスティックスを担当する方々が交流して、ノウハウを共有する場があることはとても重要だと思います。

山田 —— 公私領域では、関係者が一堂に会する合宿を行って、そういう情報共有の場を作ってきました。加えて、担い手になってくださる方々の声を聞くことも重要です。「受け取ったものをどう思いますか？」「素晴らしいと感じていますか？」「実際に社会に実装するとしたらどんな苦勞がありますか？」といったことを、僕たち領域マネジメントの立場から担い手の方にしっかりと聞くことができたらいいなと。担い手のフォローをしていくということを積み上げることで、RISTEXにおいて現場で実務を担う方々との関係をどう作るかという時の大きな資産になるような気がします。



山田 肇
「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」
研究開発領域（公私領域）総括



川北 秀人
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(SOLVE for SDGs) 総括補佐

川北 —— 研究開発の評価についても、社会技術においては「外部との接点」、ないしは「担い手の多様さ」、「多元性」などを終了時の評価に含む必要があると考えます。担い手をどう増やすかという点に関する端緒が開かれていることは、評価基準に入れておくべきですね。

小林 —— 研究開発という次元の中だと、時間軸のどのタイミングでインパクトを評価するかというのが難しいところかもしれませんが、担い手側からの評価というものは本来こういうタイプの研究開発の場合にはもっともっとウエイトが高まるべきですね。

鼎談

小林傳司
×
山田 肇
×
川北秀人